

日蓮大聖人御書全集

べつとうの^ごぼう^ごへんじ

別当御房御返事

新版
1204
ゝ
1205

べつとうのごぼうごへんじ
別当御房御返事

ぶんえいこうき

べつとうのごぼう

文永後期 別当御房

しょうみつぼう

文

詳

書

しょうろう

寄

合

聞

聖密房のふみにくわしくかきて候。よりあいてきかせ

たま しょうら

給い候え。

ごと

ふたま

きよすみ

しょうみつぼう

もう

合

なに事も二間・清澄のことをば聖密房に申しあわせさせ

たも

しょうろう

せけん

理

知

者

しょうら

給うべく候か。世間のりをしりたるものに候えば、こう

もう

しょうろう

しょうとう

思

申すに候。これへの所当なんどのことは、ゆめゆめおもわ

しょうろう

しょうろう

名

ず候。いくらほどのことに候べき。ただ、なばかりに

しょうら

恐

い

しょうろう

てこそ候わめ。また、わせいつをのこと、おそれ入つて候。

おんこころ

苦

そうろう

いくほどなきことに御心ぐるしく候らんと、かえりて

歎

い

そうら

わ おん

知

知

なげき入って候えども、我が恩をばしりたりけりと、しら

そうろう

せまつらんために候。

たいめい

はか

しょうち

恥

もう

「大名を計るものは小恥にはじず」と申して、

なんみようほうれんげきよう

しちじ

にほんこく

弘

しんたん

こうらい

南無妙法蓮華經の七字を日本国にひろめ、震旦・高麗まで

およ

由

だいがん

孕

がん

まん

験

も及ぶべきよしの大願をはらみて、その願の満ずべきしる

だいもうここく

ちようじよう

くに

ひと

しにや、大蒙古国の牒状しきりにありて、この国の人ご

おお

なげ

そうろう

にちれん

さき

との大いなる歎きとみえ候。日蓮また先よりこのことを

勘

えんぶだいいち

こうみよう

かんがえたり。閻浮第一の高名なり。

さき

憎

継子

高

名

先よりにくみぬるゆえに、ままこのこうみようのように

専 しん

もち

そうら

つい

み

歎

きわ

そうろうとき

せん心とは用い候わねども、終に身のなげき極まり候時

へんしゅう

いちじよう

変

そうろう

は、辺執のものどもも一定とかえぬとみえて候。これ

だいじ

そうろう

しょうじ

もう

ほどの大事をはらみて候ものの、小事をあながちに申し

そうろう

候べきか。

とうじよう

にちれんこころ

しょうじよ

にほんこく

ただし、東条、日蓮心ざすことは生处なり。日本国よ

たいせつ

そうろう

れい

かんおう

はいぐん

重

思

りも大切におもい候。例せば、漢王の沛郡をおもくおぼし

しょうじよ

しょうち

あと

しゅ

めししがごとし。かれ生处なるゆえなり。聖智が跡の主と

知

にほんこく

さんじ

しゅ

なるをもつてしろしめせ。日本国の山寺の主ともなるべし。

にちれん えんぶだいいち

ほけきよう

ぎようじや

てん

たも

日蓮は閻浮第一の法華經の行者なり。天のあたえ給うべ

理

きことわりなるべし。

こめいっとろくしよう

粟

こめにしよう

焼

ごめ

袋

米一斗六升、あわの米二升、やき米はふくろへ、それの

ひとびと

おんこころ

もう

尽

そうろう

みならず、人々の御心ざし申しつくしがたく候。これは

痛

思

そうろう

いたみおもい候。

のち

こころ

苦

思

そうろう

これより後は、心ぐるしくおぼしめすべからず候。よ

ひとびと

示

そうろう

ひとびと

伝

たま

く人々にしめすべからず候。よく人々にもつたえさせ給

そうら

きようきようきんげん

い候え。恐々謹言。

ないじ

乃時

べつとうのこぼうごへんじ
別当御房御返事